

クリエイティブ
creativity
creativity

PROFILE

川崎和男 | かわさき かずお

1949年福井県生まれ。デザインディレクター、医学博士。金沢美術工芸大学産業美術学科卒業後、東芝に入社。伝説のオーディオAurex（ロゴも）を手がけたのち、1979年に独立、川崎和男デザイン室を立ち上げ、2年後には地元・福井に拠点を移す。以降、ナイフ、液晶テレビ、眼鏡から人工心臓にいたるまで多岐にわたる製品のデザイン、研究を進め、名実ともに、インダストリアル・デザイン、プロダクト・デザイン界の第一人者である。2001年～03年まで、グッドデザイン賞審査委員長。現在、大阪大学大学院工学系研究科教授のほか、同大学コミュニケーションデザインセンター、未来医療センター、フロンティア研究センターの各教授も兼務する。



デザインディレクター・医学博士 川崎 和男さん

肩書は、ドリームデザイナー。

時に「喧嘩師」と呼ばれ、自身もそれを自称する。
妥協や他の追随を許さないその仕事と成果によって
常に世界が注目するデザインディレクター、川崎和男さん。
デザインとの出会いから、計画中のプロジェクト、そして未来まで
デザイン界での36年間についてお話をうかがった。



①



②



③



④



⑤

- ①「タケフナイフビレッジ」キッチンナイフArtus(アルタス)
川崎さんは越前打刃物(福井県)の若手職人らと手を組んで斬新なデザインの包丁類をつくりあげた。
- ②人工心臓
川崎さんがデザインした人工心臓の模型。川崎さんはその理論を論文にし、医学博士に認定された。
- ③増永眼鏡 Kazuo Kawasaki Ph.Dのアイウェア
Anti-tension (アンチ・テンション)
同シリーズはレンズの歪みから生じる眼への医学的負担を皆無にした理想的なフレームデザイン。
- ④CARNA (カーナ)
チタンのフレームにアルミのホイール、折り畳み式のシートとカラーリングにより生まれた軽快な車椅子。
- ⑤FORIS.TV
株式会社ナナオ「EIZO」ブランドの液晶TV「FORIS.TV」は、360度どこから見ても美しいデザイン。

■ 赤い血より、赤い絵の具

破格の人である。「たわしから人工臓器まで」と言われるように、手がけてきた製品の種類は、これが一人のデザインディレクターの下に生まれたとは、にわかに信じがたいほどだ。同時に医学博士でもある。スケッチブックの中には数式がいっぱいだという。「それがデザイナー?」。そう、それこそがデザイナーなのだ、と川崎さんは言う。デザインに対する無知、無理解、偏見と闘い続けた36年間だった。

「デザインに出会った時は、たいしたことは考えていなかったんです。父が非常に厳しい人だったので、ほくは小説家志望だったんですが、まずは医学部に行こうと。作家には医学部出身が多いことと、医学部なら親父も納得するだろうと思った。ところが、医科大にことごとく落ちてきて(笑)。唯一ひっかかったのが金沢美術工芸大学。なぜそこを受けたのかというと、大阪で浪人している頃、阿倍野界隈の古本屋をよく冷やかしていた時に「アトリエ」と

いう雑誌や、創刊されたばかりの『平凡パンチ』『週刊プレイボーイ』をよく見ていたんですね。特に横尾忠則さんの作品に強烈な衝撃を受けました」

大学に入学し、電話機をはじめ本格的な工業デザインを学ぶ過程に入ると、同級生とは明らかに異質な、教授連からも注目される資質が開花していく。

今日の川崎さんを生み出すにあたって、印象的な言葉がある。

「厳格な親父と対照的に、母は、『あなたがやりたくないことは、やらなくていい』という人でした。学校に行きたくないといえば、即座に受話器をとって『きょう、休みます』。その母に、悩んだ末に打ち明けたんです。『じつは医大に行くのをよそうと思う』。すると、母は言いました。『そうしなさい。あなたには向いていない。赤い血より、赤い絵の具のほうが楽しいよ』。ああ、もうこれで決まりだ! と思いました」

■ 負けている日本

日本オーディオ史にその名を刻む東芝「Aurex」のアンプやチューナー。郷里の福井に連綿と続く越前打刃物の伝統に「デザイン」を持ち込んだ「タケフナイフビレッジ」。フランス・シルモ展でのグランプリ受賞をはじめ、毎年、世界がその新作を注目する「増永眼鏡 Kazuo Kawasaki Ph.D」のアイウェア。そして本誌今号でも紹介している株式会社ナナオのEIZO FORIS.HDは、常にハードな競争にさらされている「液晶TV」の世界にあって、唯一無二のクオリティを誇る。これらは川崎さんが発表してきた製品のほんの一端だが、どれか一つだけでもデザイン史に個人名を残すにはじゅうぶんな業績だ。

その川崎さんは、現在の日本のデザイン界に対して、じつは相当、悲観的だという。

「デザインがブームになったぶん、造形や仕上げが軽薄になり、商品は短命になりました。半年間でモデルチェンジする商品たち、すぐに

デザイナーとは、
理想主義を具体的に
目に見える形で
提案できる職業。

2時間を超えるインタビューにも精力的に応える川崎さん。
その視線を支えるのはもちろん、Kazuo Kawasaki Ph.D.のアイウェアだ。



別の企業に鞍替えするデザイナーたち……。ほくが東芝時代に作ったAurexのアンプやチューナーは、35年も昔の製品なのにいまだにネットオークションで取引されています。東芝を辞める際は、『今後5年間は、オーディオの仕事は一切しない』という誓約書を書かされました。もはやそうしたモラルは失われてしまった。

そうした中で、ジャンボジェット機、船、医療機器など、政治的に日本人には造らせてもらえない工業製品がどんどん出てきました。日本のデザインはいま、世界で負けている。ほくはそう思います」

■ デザイン数理学へ

もちろんそうした状況を、川崎さんが手をこまねいて見ているはずがない。もともと、常に強烈なオリジナリティとともに局面を突破してきた人だ。だから現在の「憂慮」は、教育者の立場に立たざるを得ないがゆえの苦い認識なのである。

「ほくは、『リハビリテーションとは治すことではない。使えなくなった機能をあきらめてしまうことだ』という言葉にショックを受けました。

『もう歩けないんだ』という事実を速やかに受け入れ、ではどうするか、車椅子だ、と思考を突き詰めていくことが求められた。そこまで行けた時、『既存の車椅子は嫌だ。スニーカーみたいに軽やかなものを自分で作る。それがデザイナーとしてのオレの宿命だ』という地点に立つことができたんです」

こうして生まれた車椅子が、「CARNA(カーナ)」である。軽量素材のチタンを全面的に使用し、スポーティーでアグレッシブな車椅子。川崎さんは、29歳の時、乗っていたタクシーが飲酒運転のクルマに突っ込まれ、脊髄損傷の重傷を負っている。以降、車椅子生活に入った川崎さんにとって、「CARNA」はまさにアイデンティティともいうべき存在だ。

「CARNA」は、ニューヨーク近代美術館(MoMA)の永久展示品となり、2004年のMoMAリニューアル記念展では、数々の展示品のうち日本から二つが選ばれ、その一つとなった。

「インダストリアル・デザインを手がけるにあたって、多くのエンジニアやサイエンティスト

と付き合ってきました。彼らの多くが、『しょせん、絵描き屋さんだろ?』と、どこかで思っているわけです。ほくはそういう世界で常に闘ってきました。

そして近年は、デザインを考えるうえで、数式ということを使い始めている。デザイン数理学というものを考えているんです。数式でとことん突き詰めながら、そこに色彩や線の問題を入れていく。医学の世界にデザインを取り込むフリをしな——ほら、そうすれば大きな予算が使えるからね(笑)——じつはデザインの世界に医学を吸収しちゃう。デザインこそが、アート、サイエンス、テクノロジー、この3つの上に立つ概念なんだ、と学生たちに言い聞かせています」

■ Peace-keeping Design、そしてタイムマシン

その「医学」と「デザイン」が出会った一例を紹介しよう。低開発国向けにワクチンデザインシステムを構築しようという、PKD(Peace-keeping Design)活動の提唱だ。

「PKFやPKOというのは、結局は銃を構えた

世界です。そうではなく、デザインの力でPeaceを現実のものとしたい。

いま、低開発国向けに出回っているワクチンの多くは、政府官僚の子供たちに独占され、一般の子には行き渡りません。ワクチンは腐るから、日が経つと捨てられる。捨てられたシリンジ(注射器)は中身を抜かれ、代わりに麻薬のために使われる。

こんな悪循環を断ち切るには、一度使ったら二度と使えなくなるデザインをはじめ、パッケージから管理システムまで、トータルなデザインシステムの構築が急務です。企業の協力も必要でしょう。ぼくはこのプロジェクトで、日本企業の度量を試してやろうと思っています」

プロジェクトはこれだけに留まらない。「これ言うのと、またマッドサイエンティストみたいって言われるなあ(笑)」と川崎さんが微笑むもの……ズバリ、タイムマシンへの取り組みである。

「いま4次元CAD(※1)をやっています。4次元、つまり時間軸が入ることで、作るのに2秒かかるもの、2週間かかるもの、20年かかるものを、すべて一挙に見ることができる。こうした研究の延長線上には、どうしたってタイムマシン、ということが出てきます。タイムマシンが成立するためには、4次元の世界に出たものを、もう1回、3次元に戻してやる必要がありますが、それは、不可能ではないかもしれない」

そんな夢みたいな……。こうした揶揄の声は、しかしじつは川崎和男というデザインディレクターの本質を、図らずも言い当てている。なぜなら、時に自分で「ドリームデザイナー」と書き記して名刺を渡すのが川崎さんだからだ。

「理想主義を、具体的に目に見える形で提案できる職業」(※2)がデザイナーだと川崎さんは言う。理想を追求するために、数学、サイエンス、テクノロジー、アート、すべてを導入して、冷徹に、そして厳密に現実を構築していく。

DESIGN A DREAM ——デザインの力で世界を変えることができると、本気で信じているデザインディレクターが、日本には、少なくとも一人は、いる。

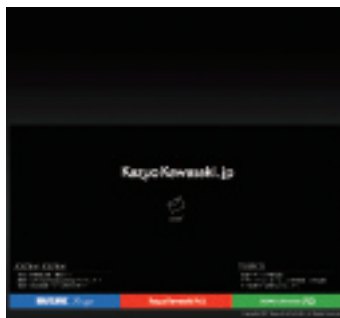
Text by : 直哉モレットイ

- ※1 【CAD】 Computer Aided Designの略。コンピュータを用いて設計すること、あるいはコンピュータを用いた設計支援ツールのことを指す場合もある。
- ※2 「理想主義を、具体的に目に見える形で提案できる職業」とは、「ドリームデザイナー」(川崎和男著)より引用。川崎さんがインタビューに応えた言葉である。



川崎さんの生み出した「CARNA」は、インテリアショップや住宅展示場で目にすることも。やはり従来の車椅子とまったく違う。

WEB



KazuoKawasaki.jp
<http://www.kazuokawasaki.jp/>



artgene (アートジェーン)
川崎和男さんのブログ
<http://artgene.blog.ocn.ne.jp/kawasaki/>